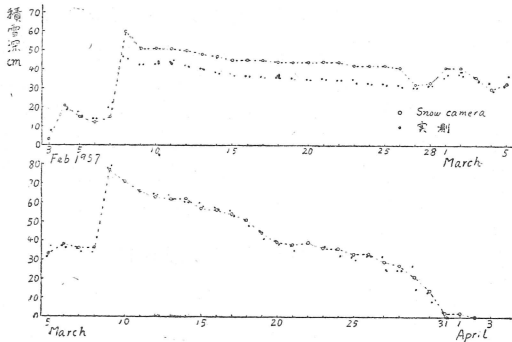


第7図 記 録 一 部



第8図 中宮祠における積雪量
 ○: Snow camera, ●: 実測

における9時と15時の実測である。実測と10cm位の差の出ていることもあるが、実測は別の雪尺で測っているものか、また雪面の凹凸のため誤差がでているか明らかでない。filmは撮ってから4カ月後に現像した部分もあるが、積雪の読取は可能な程度には像はできていた。露出は平均に過度で、ことに積雪期間は紫外線のため読取も困難なほど真黒であった。filterをつけてなかったの

で、次にY2位のfilterをつければ像は良くなるであろう。使用したfilmはコニパンSSであった。

6. 結 言

実用試験の結果は shutter が不完全なため、かぶりもあり、屋外の lens がくもることもあったのが、陰画としては良いものではなかった。しかしこの程度でも積雪量の読取は十分に可能である。長期自記積雪深計としてこの snow camera は、小型軽量で取扱が容易なこと、記録の読取が簡単なこと、値段も比較的安価にできることなどの点で有利である。山地に設置しておくとき小型なだけに盗難のおそれのあるのが欠点である。

この試験の結果はまた長期間の記録に camera 方式を利用し得ることを示した。河川の水位その他計器の示度を記録することもできる。また植物の生長の観察など目的に応じて類似の構造で1時間ないし数時間ごとに撮影するものを作ることができ、このような自動カメラの用途は広いものと考えられる。

この実用試験は吉成宇都宮地方気象台長の取計いで中宮祠測候所の露場に設置され、記録した film の現像に至るまですべて現地で行われたものである。吉成所長および星前中宮祠所長他関係各位に厚く感謝する。

書 評

小林英夫, 根本順吉著 地球の探求
 筑摩書房発行 版 210頁 350円

小倉金之助氏監修のやさしい科学の歴史中の第5巻として書かれたもの。化石の正体、地殻の正体をどうしてつかまえたか、地球のなかをしらべる、地球は大きな一つの磁石である、地球の伝記はどうしてわかってきたか、海のなかの川の発見、天気図と天気予報のはじまり、成層圏をこえて、この8章にわけて、それぞれについて昔から現代にまで考えがどのように変わって来たかをわかり易く述べている。代表的な学説を出した研究者が、古い順につきつきと出て来て、学説が紹介され、学説が変わって行くさまが説明される、と云う書き方の章が多いようだ。このような方法がもっとも良い説明法であるかどうかはわからないが、わかり易い一つの方法ではあろう。前に表われた学説がどのようにして否定されて、新しい学説が出て来たか、と云うことを主眼にしたような書き方、の章も欲しいと思うが、こう云う見方は科学的に

見て間違っているのかも知れない。第6章の海のなかの川の発見、などでは社会の進展につれて、航海や海底電線ふ設などと関連して学説が進歩したことが書かれているが、このような手法が一番自然で良いのであろうか。学問の分野によってその発展の仕方もいろいろなのだから、一概には云えないのだから。

科学史に詳しい著者がうん蓄を傾けたものだけあって良心的な立派な内容だと云うことができよう。こまかい点では、たとえば、放射能元素の崩壊性を利用して岩石の年齢を求める方法のことがのっているが、その具体的な考え、方法について書いてないので、学生にはわかりにくいに違いない。紙数等の点で無理なのかも知れないが、こう云う説明は重要なものではなからうか。

図は115もあり、2頁に一つの割で入っている。図の1つがさかさになっているのはまことに残念だが、注意しないとわからないような図だから、止むを得まい。人名、事項のさくいんもあり、年表もつけてあるのは親切である。
 (有 住 直 介)